

令和8年7月29日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

夏期における白ネギの害虫防除対策について

令和8年7月中旬に実施した平坦地における巡回調査および県北部に設置したフェロモントラップ調査において、シロイチモジヨトウの発生が多く確認されています（図1、図2）。また、6月1日に病虫害防除技術情報を発表したネギアザミウマについては、引き続き平坦地を中心として広範囲で発生が確認されています（図3）。

両害虫は高温乾燥条件で発生が助長される傾向にあり、1か月予報（7月23日・福岡管区气象台発表）によると、平均気温は平年並20%、高い確率70%、降水量は少ない確率40%、平年並40%と、高温乾燥条件で推移することが予想されており、今後さらに発生が増加することが懸念されます。圃場内での発生状況に注意し、早期防除に努めましょう。

1. 発生の状況

7月中旬に実施した巡回調査結果

【シロイチモジヨトウ（平坦地）】

発生圃場率：62.5%（平年：38.0%、前年：65.5%）

平均被害葉率：3.8%（平年：1.9%、前年：2.5%）

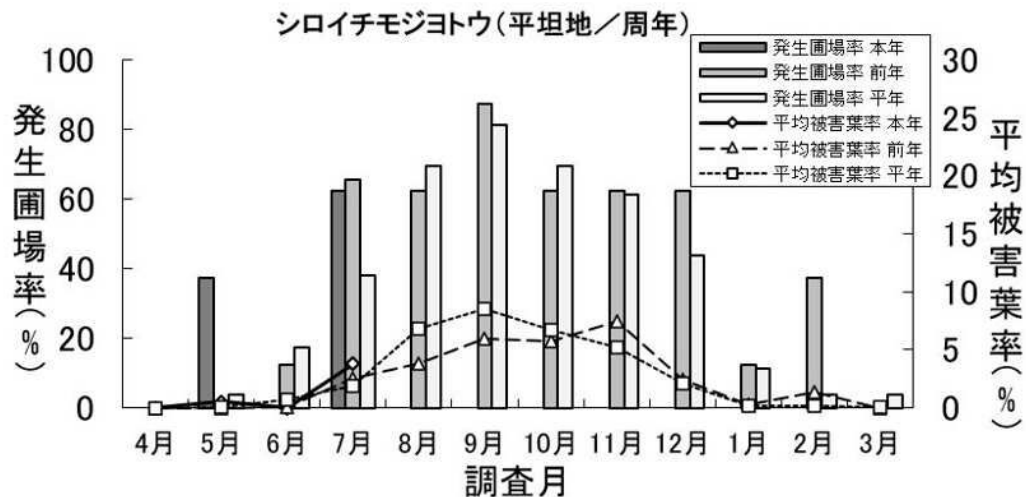


図1 白ネギ発生予察巡回調査におけるシロイチモジヨトウの発生状況（平坦地）

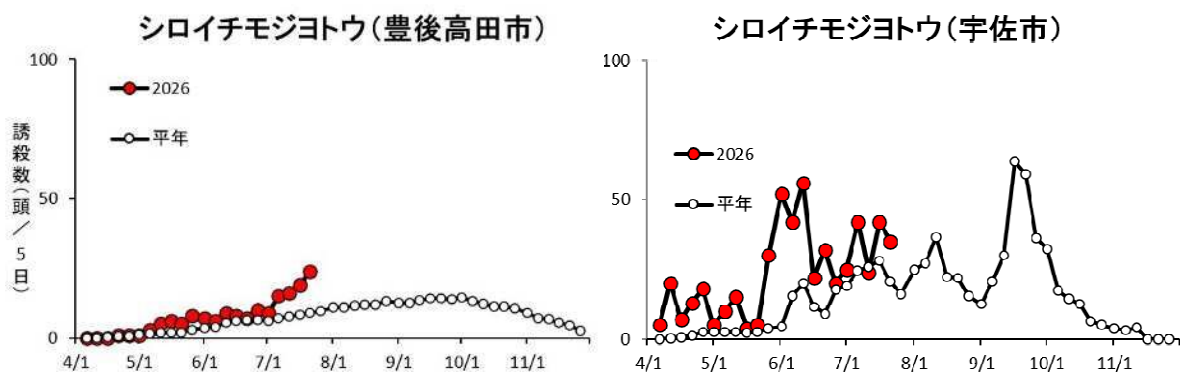


図2 県北部地域におけるシロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺状況

7月中旬に実施した巡回調査結果

【ネギアザミウマ（平坦地）】

発生圃場率：100%（平年：79.6%、前年：100%）

平均被害度：12.7（平年：13.5、前年：26.3）

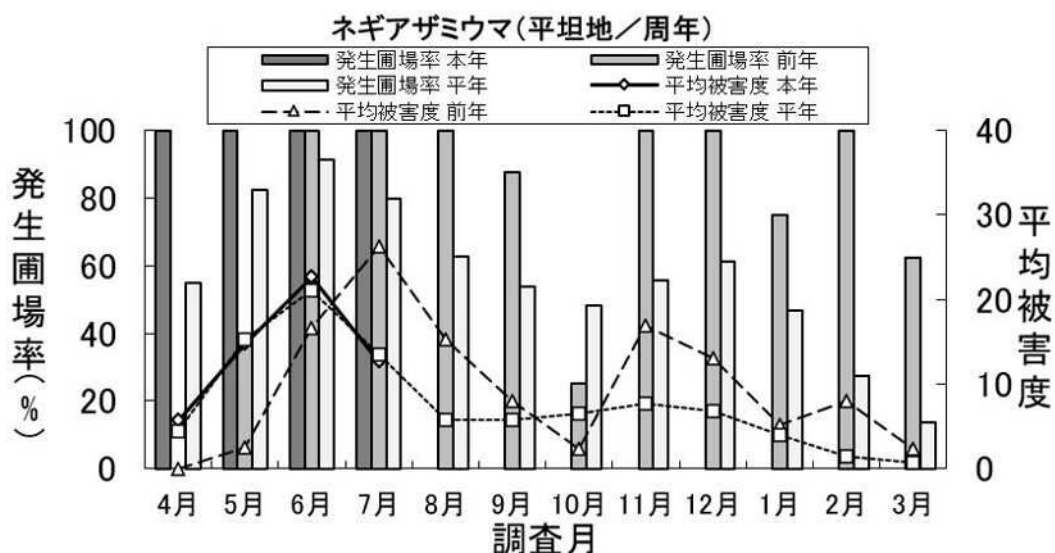


図3 白ネギ発生予察巡回調査におけるネギアザミウマの発生状況（平坦地）

2. 防除上の注意事項

(1) シロイチモジヨトウ

- ・葉身内に侵入することで薬剤がかかりにくくなり、防除効果が著しく低下するため、圃場を定期的に確認し早期防除に努める。
- ・交信攪乱剤は殺虫剤と比較して抵抗性が発達しにくく被害抑制に効果的である。一方、近年の夏期高温により、残効期間が短くなる傾向にあることから、発生状況に応じて薬剤防除も併用しながら活用する。

(2) ネギアザミウマ

- ・圃場内および周辺の雑草はネギアザミウマの増殖源となるため、除草を徹底する。ただし、防除前に除草を行うと、圃場外からの飛び込みにより被害が拡大する恐れがあるため、圃場内の白ネギに対して防除を実施した後、薬剤の効果

が残っている内に速やかに除草を行うよう留意する。また、アザミウマ類は風で移動するため、特に圃場の風上側の除草を心がける。

- ・次作以降のネギアザミウマや本虫が媒介するえそ条斑病（IYSV）の蔓延を防ぐため、残渣の処分や圃場周辺の除草を徹底する。
- ・ネギアザミウマは、ユリ科、アブラナ科、ウリ科、ナス科、キク科およびバラ科など多くの園芸作物に被害を及ぼす害虫であることから、作物体を注意深く観察し早期発見・早期防除を心掛ける。

（３）共通事項

- ・薬剤散布については、農薬使用基準（希釈倍数、使用時期、使用回数等）を遵守する。散布時は展着剤を加用し、十分な薬液量（ラベル記載内容の範囲内）で丁寧に散布する。
- ・薬剤抵抗性発達を防ぐため、同一系統薬剤の連続使用は避け、ローテーション防除を心掛ける。防除に使用する薬剤は、大分県農林水産研究指導センター病害虫対策チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針

(<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/boujoshishin.html>)

「ねぎ」の項を参照する。なお、薬剤によっては指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、容器のラベルに記載されている使用時期、使用回数等を遵守し使用する。

病害虫対策チームホームページ

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/>

